

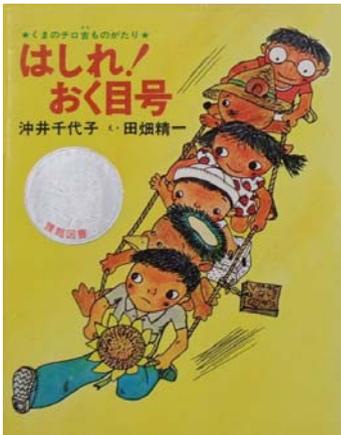
# 本との出会いを楽しむ 第7回

## とにかく、読んでみよう。

教育学部准教授 山本 欣司



**出会い** 読書が趣味になったのは、ある本との出会いがきっかけです。私の通っていた小学校では、新しく購入した本のカバーはすべて剥がし、図書室脇の掲示板に貼り出すようになっていました。『走れ！ おく目号』というタイトルと表紙の絵を見て、何となく面白そうだと感じた私は、ために借りてみたのです。小学校の三年生くらいでしょうか。



親からは読書を勧められていましたが、面倒だったのか、私はそれまで本を読まない子どもでした。が、ぬいぐるみの熊とともに子ども達が見知らぬ世界で冒険する『走れ！ おく目号』の面白さ

に夢中になった私は、この作家の作品を図書室から順々に借りては読み、いつしか読書の魅力に取り付かれてしまったのです。ファンタジーから偉人の伝記、当時定番の怪盗ルパンや怪人二十面相シリーズなど、図書室で手当たり次第に本を借り、読みふけたものです。中学生くらいになると、父親の本棚から司馬遼太郎や山本周五郎といった歴史小説を引っ張り出して読みました。映画とのタイアップで売り出されていた松本清張や森村誠一などの推理小説もよく読みました。

ただし、現在の職業からすると意外がられるのですが、当時、私の国語の成績はよくなかったで

す。今思うと小説のストーリーを追いかけるのに夢中で、細かな表現をおろそかにする読書が続いていたからだと思います。一週間に何冊読んだか、一冊を何時間で読み終えたかを自慢するような意識で小説に向かっていた私は、たった一行、たった一言に込められた想いをめぐり、ちゃんと立ち止まって考えるような、意識的な読書をしていなかったんだと思います。読書量への自負もありましたし、読んで感動した以上、自分はちゃんとその小説が理解できていると思い込んでいました。へんなプライドを持っていたため、国語の授業をまじめにうけようとせず、ノートも取りませんでした。

**転機** 本の読み方が変化したのは、大学受験がきっかけです。それまで私は、暗そう・偉そうという先入観から文学作品を避けていたのですが、高三の夏、芥川龍之介の小説と出会いました。模試の成績を上げたいとの不純な動機からですが、読んでみると文学は「ただの面白い小説だ！」と目から鱗の落ちる思いがし、ここから文学三昧が始まったのです。ちょっとした描写の鮮やかさに驚き、凝った表現にうならされ、一つの作品を何度も読み返すうち別の解釈に気づくこともある。これまでの読書で味わっていたのは別種の面白さに打たれた私は、大学で文学を学ぼうと決意しました。丁寧に本を読む習慣が身につくと、国語の成績も上がりました。

大学へ入ってからは、大好きな小説を読むこと＝研究となり、充実した時間がすごせたと感じます。本当に興味のあることを学べるというのが、大学生活の醍醐味ではないでしょうか。

(やまもと きんじ)

山本欣司先生は平成23年3月31日付で本学を退職されました。  
これまでの沢山のご指導に感謝いたしますと共に、今後のさらなるご活躍をお祈りいたします。

## 本との出会いを楽しむ 第7回

### お気に入りの1冊

農学生命科学部教授 石川 隆二



アメリカの大型書店バーズ&ノーブル、とある映画のモデルになったようなところですが、留学中にはかなり頻繁に通った記憶があります。いまでは日本でも本屋さん椅子を置いてあるところもありますが、20年くらい前とあっては、「本当にこれで売れるの？」という不思議な気持ちを持ったものです。そうでなくても地べたに座り込みながら本を読んでいる人も多く、居心地の良い音楽を静かに流しながら、時には講演をおこないながらサロンとして機能していたのでしょうか。

私のお気に入りは理系書ですが、それ以外でも昔読んだお気に入りのサイエンスフィクション（SF）の朗読版のカセットなども置いてあり、数本買って聞いていました。朗読者が目の悪い方に読み聞かせるためのものでしたが、SFだったため男の朗読者が男役、女役、まさしく老若男女の活躍で、聞いていておもしろかったことを覚えています。

日本でも椅子をおいて本当にお気に入りのものを買ってもらえるようなところが増えてきたようです。その点、図書館はただですから気が楽ですね。昔は本の揃えが少なかったように思いますが大学も蔵書数を着実に増やしており、おもしろい本が増えてきたようです。買うかどうか迷っている時でも気軽に試せるのが図書館のメリットでしょうか。

本学の図書館ではSFではなくて、自分の知らないことと出会うために本を手にとることが多いように思います。理系人間にありがちなように歴史に疎いところがありますが、外国での調査旅行のために現地の歴史を知ることが目的に本をとることが多くなりました。また、専門分野外の方と仕事をするときにはなおさら他分野の本を手にとって、その分野の“感覚”のようなものを知ることにも努めています。最近でいえば考古学、民俗学、初期の海外探検航海や暗黒大陸と呼ばれるような未知の大陸内陸部探検ものなども読みました。このような知識は単なる基礎知識というよりも、相手がどのような背景でものを考えているか、その土地で暮らしているかなどを知る上で非常に役立ちました。仕事を超えての会話を現地の方などと楽しむこともできるようになりました。

このページを書くことになってざっと本学図書館内を散策しましたが、専門外の棚にも自分に関連するようなことに触れている本を見つけることもできました。そのうち、お気に入りをみつけたらきつと購入して自分の本棚にいれることになるでしょう。そして自分の椅子に座ってゆったりと読書を楽しむつもりです。

(いしかわ りゅうじ)